









玉取

邦是偷盜ハ貧困の因縁  
 慈悲惻隱ハ富貴榮光の  
 主トシテ也ヤ  
 天地ハ忠國王忠恩ハ生  
 忠父母ハ忠伴ハ重  
 是父母の忠ハ  
 多ク形類ハ不仁  
 有小有忠  
 郭巨ハ母  
 乞婦ハ

故  
 梅若誠  
 昭和年  
 梅若重  
 寄贈





多りし酒多又残りて天  
雷終り身を裂き強婦と  
母を亡はしけく靈地命成  
奪取し上世と具首  
阿羅小むひたりし海  
室経を説きんを物利天小  
のわらふは世居り法成  
世へ多しも佛母摩那支  
人志孝者長りおほり儒教  
此五常釋門の戒すても  
そそ者りの心持と多し

なまむね

近江八景

あまのりしとあまの比良山  
小松うゑ小吹嵐ハ山市  
晴嵐もわらわらんそとれ  
美野うへはの例湯れきゆハ  
雪しやええそく江天の昔も  
り異なりしゆゆ細白  
思ふやうふいそんのと  
りき南 坂 行田の浦の釣  
秋の沖より家路もやゆ



とく遠浦の故帆くしり  
朧の雲北一むら残き向を  
夜雨のふみぬり止比叡の  
夕霞の撞れを夕を遠守れ  
晩鐘くく少少を賀辛湯の  
洲ききり習者と多りか  
あ平沙の落序り是を津人  
しと洞庭の月少を鏡志  
山吹あふり手と梅田の色  
の夕よふ八瀧村の夕懸り  
お和のり漁村の夕懸り

松かひり

和國

名十、  
舟道くも山や高類くも夕映  
まか例あま瀨の志砂を  
あまゆく桂れ道志法見  
まけ往長くお戸杜をら  
河く秘もわらわ人ふ  
又それぬり水くを免向  
地まて和玉の風作神の  
押代もももまら  
上、  
されもやまらりてに詩を



はくしゆはくしゆをいふ作のちがは  
しる花を風月をわづらふは  
ゆきをいふ敷く浪の音笛は  
新れ吟をいふは年輩は  
色は白きしり唯人を乱舞  
ふは小交りてをを延び  
るはあひれはひたりん

四季

柳天のうかぢい雨雪の  
雪れ川城ををわづらふ  
名月花のさけり徳成分

はくしゆ雪しそまに胸を  
きも先春の梅様は  
ちねしあふ雪成り  
あはれは夏はしるの  
あやれは雪らまはるは  
雪のゆきをいふは  
りゆきをいふは  
まを月月山をわづらふ  
ゆきをいふは雪をいふは  
ゆきをいふは雪をいふは  
ゆきをいふは雪をいふは



山深りしやあはれ

鼓浪

春色の一夜に  
清香月を  
時を笑ふ  
流るる水も  
白やゆり  
春はあけぬ

天花小碑  
我々心  
名は馬山  
時を笑ふ  
深き山



撞之四重布はてな人々  
風を吹かちりらひ  
群も袂を潤すも  
抱く青嶂あり後  
鳥花をぬらして  
あり松川なりも  
さひあらしも  
くそつばあり

香推

白屋の宜己  
ひらふやれを日本神

なり天孫あり  
我背極支志く  
く我人皇の  
事具も西  
けしりり珠を奉  
千珠く云も  
之は喜珠曲  
小巻と物を  
跡をたし  
わを流ひ  
は川上の西











目をや送御へおれしと  
わがのくさるるを  
あつらひしものありある  
しは流花を道を通り  
とも云ふ此抄ありし  
なりし

註

むかしは酒造り  
雲の上人ありし戸を  
みよき水はゆき  
りしものありし

板底のありあり  
たのしいの事なり  
其儀をこれ神を  
引くものありし  
た年月移りし地  
は浦のまじりし  
と白浪のまじりし  
まりし伝説ありし  
多しありし  
砂を踏むる地ありし  
りし思ふに



形多しんを去れと歎いも  
相形ももはくくとは是  
いしん人専もはるは  
ふ麟や澤小住姓うに  
う長江う心たれは  
越四生ううと也る車  
輪のわくうれ朝や花小啼  
うしすもおれく山法な  
ふとて枝系を踏ら陸  
うとてあうりたれ

重感

まひり頼泉の沐して身を  
洗ひ首陽中、藤と様とほ  
こるしとい民の御もは其  
上心地親経の文とふに世  
う四忠い天地の忠國王の  
忠父母の忠亂生れ恩うの  
け小光帝皇子は胡忠なり  
普天のト王古小のうと  
云事ぬくカカれもや  
十萬万宗の沖位をう











をありけり禮祥し世傍り  
希く跪き姿を首をか林  
り意なきし雪の中れ芭蕉  
の傍りハ何れもくくをえて  
何れなるも地をうけり  
宗門の中ハ直入ぬ兼地  
うれ直をうけり針叟ハ  
悉く唯一心のよあり念  
不生ありきりあを御も  
生をいけりありして  
是り美り九畹非念亦小

類局もどれを色敷て拂  
上糸代礼きり柳ハ緑  
なるを其あふ錦を織  
丁奴花もす紅の色け介  
とけり初めり小悟も只  
未悟の時小違ひはこり未  
悟小ゆめりしと如來地  
心中にん

鴻池

指上  
い鴻の回力を遠小ん波  
去を漫りきり海上り水



れ煙と雲あめく望はとこ  
とを志く浪の汀に松と  
林扉すゝえをく山をめぐり  
けり志趣し一壺少飲を  
かり子の雲後を分て得  
る山有乳の山や雲玉あり  
年み娘の泣きをを清し  
花し鏡ぬハ消残る雪の  
ふれり山と葉は輝吹鹿の  
烈しはく雲あめ月うよこ  
る海をををふふる波をを

三上た上りく山は別く受  
の多し山つとく入て不  
動也門はくくもをいさ  
山程もろけく人懐かきぬ  
ねをいさ志買れ故郷花  
園の玉や散くんとをい  
ぬうれ後すくをわ物く  
相あつんた敵中くわり  
て名をく山ををくを禁  
もりあつんた山ををくを  
つ牙あつんた見くをを







らに其のち須佐之男  
命よりそ中もあまを  
又字不定すまらる  
と須佐之男の命宮造  
及手所をおまの國  
須佐之男のちつら地  
あまを神賀して神  
八雲を出雲八雲  
爾八雲造其八雲  
あまを神賀して神  
世ふあまの人

上代天皇と極の  
つをほくろふ  
松の葉のちり  
れつるあまの  
松の葉のちり  
れつるあまの  
細文の智女  
びはるあまの

上宮太子

神武天皇三十二年四月



朝日あけすく清き想の光  
あり金文の傍より流るる  
うきく宣く我れ救世の願  
あり別所の清胎肉ふらる  
及し有しやは依りて  
空にぞそよる胎肉も垢穢  
れりしつて貴きし清神とや  
うし流るるを僧  
まことのまじり我れ垢穢  
とてす唯をまじり人間  
あはれあきんりありけり

作辭をたたく西の空を  
くもく阿のくわしげ僧大  
さふり流るるを清の清に  
に流るるを清の清に  
暁月朝不暉手松風を  
破つ毎五更の天をわらわ  
帝このよき下はわらわ  
やの流るるを清の清に  
を流るるを清の清に  
ひまの流るるを清の清に  
波提河の流るるを清の清に



濁る如く母を十三歳に  
宮中の侍所めく後産す母  
皇子は彼生する既戸北皇  
子より色上官を子り御事

及之免香

上ニニコ一ニア一日ハス  
色去て祿もぬく町あり色  
消く今もあ煙もく  
及魂り孝行のり子れり  
わしとや志厚く色もぬ  
色ハ漢帝も孝吏人の別  
ゆへ耳泉殿の床のうへ

古に家り恨をそく九花帳り  
仲あけけけ香れ煙を立行  
此夜更り鐘の音数容便  
と守文より玉殿より後ひ  
く孝吏人の侍もく  
見え給へる上三夜中  
新月の夜半は環ぬ  
長女雲上れ粒い月宮り  
子の地して皆感涙を催せ  
君を顔小御袖を押し  
て及免の煙りちり立



勢に歩居へん又李史人と  
消くは城敷をさす有明の  
見えつり多き河のありの  
ありなりたれ沙汰が中と  
といふもさきり

碓氷山

勢多に本宮殿と西万原路と  
川原この碓氷をふりおれ  
林を陣をさす平家の勢ハ  
十万余騎雲居の如く満々  
多上止まふ源氏なり

平家と歩居に相さへ  
虎の威をさすし獅子象  
勢い帝釈佛を打ち  
をさす月日を五原路  
ひたり先味方のりの謀小  
と軍八日とぬきぬき敵  
はゆこゝろをめて主後ハ  
そを陣をとれ多きハ  
味方少きを勢りさす勢  
をちりほし人さすあり  
あり代りりさす



う、伊、藤、氏、より、東、の、方、と、見  
わ、り、を、し、た、頃、を、享、永、二、年、  
又、月、半、の、事、な、り、ふ、是、の、由、  
を、事、に、し、青、糸、の、陰、り、も、  
朱、に、玉、垣、に、は、の、え、を、く、か、  
う、知、れ、る、の、社、檀、あ、る、と、  
尚、家、人、伊、氏、神、代、懐、大、美、  
薩、州、丹、生、れ、ふ、と、  
本、房、後、頼、朝、を、か、  
う、と、し、は、軍、事、が、多、  
段、定、あり、や、明、て、社、檀、小

す、り、を、頼、書、を、を、  
い、は、め、を、を、  
伊、藤、氏、の、曹、を、  
に、の、あ、り、の、令、り、  
を、を、出、し、を、  
筆、を、を、を、頼、書、  
て、も、心、を、抑、け、  
苟、初、め、の、任、  
の、其、の、和、漢、  
を、を、水、を、流、を、  
を、を、牛、を、を、



よらゝいむにり〜す〜  
矢を空に射て〜  
流るる河川の兵を〜  
北極を〜  
千指を〜  
情大善の流れて〜  
を〜

俱利伽羅落

名  
さり程不補不入〜  
三思之人あり〜  
集て皆雨の先火を焼か

追拂を〜  
みちり〜  
く〜  
集ま〜  
今井の〜

上

遊多〜  
し〜  
不岡を〜  
〜  
お谷小〜



馬が枝りまうく七万  
解務はくまのりか谷の深き  
とを浅くかりたを埋りあり

心五取

剛一筆むりあめまを天  
はるねまあうしに梅花雪  
を帯して白ゆ文をま柳の本  
末うねぬ花をのねり  
あり花の難い学れぬ小  
さまこもして梅のまのさ  
ハあつをねぬる法極り青

柳を叩く糸りしをて学あり  
縫てぬ梅のもまの感威  
普に神海末の世まを  
白い久し山高き花れ善い  
さ小強まをて矢の香久ふ  
とをに名りし山の中を  
小感威の普に花のほをま  
小似らまをねま妙なる梅毛の  
顔をもまをうのりねねひ  
まをられまに白いうね柳  
の眉のまをりまをたまの







の娘ありありありと十二の行  
物も純潔の事あり人の  
行勢ありありありの其名の  
所を書替へて居る上童小  
孫子のありありありあり  
の社小ありて日教を送り  
祈をもとに懇誠さばかりおと  
さりとかくも感念いうてたり  
ふんと程を治く可なり  
賢手神の津市もくあり  
小法格をやるの勢あり人

是れは老人なりけりあり  
代率ありありありあり  
ありありありありありあり  
奥儀を清く清く清く清く  
ありありありありありあり  
ありありありありありあり  
ありありありありありあり  
ありありありありありあり

妻戸

比叡山延暦寺の住持法性坊  
の傍にありありありありあり



日  
おしと之伏の夏は夜も更を  
いさよのさきよふ九識の室の前  
十宗此床のまを不偷伽の法  
水を湯とく之窓の月を燈  
し多平少女カクシ毒牙をかりく  
た敵群をぬり誰れらん  
らたア哉や死に之流るるを  
に二月の夜はあり五日の世  
哉さるる終をひきし世に  
あまふらねるるに思  
後やとるる思法し今より

源教あり沙を除何事やか  
いし有しやと長云こころ  
のまはやく濁まる世に  
あまふらねるるに思  
りあまを報とるるに思  
とねりなるるに思  
あまふらねるるに思  
かりとも肉裏小倉とねる  
はまをせよふこの思を  
よのハ報とるるに思  
憤はかてもねるるに思



のり家勅使やらとても一  
夜すても糸あまし勅使三  
夜ふりしと普天の平去  
り濱王去小あしとて中  
し山北とていしとて  
菅公面々まらりしにハ  
ら野路ひたりし津前小  
柘榴をまきしとて  
早合むとていしとて  
碎き事ありしとて  
あまし柘榴とていしとて

火縮しりかき事戸小三尺  
いしとて焼く事心とて酒  
水の市代結く後字の傷を  
痛きしとて火縮ハ消ふりや  
なとの妻戸と山とる市坊  
りてふとていしとて

當頼暮頭

法もハ妙なる法の教唯是仏  
果の直道なりしと六種展動  
しとて人を動かし即起  
眼を打てぬる甚深と目



前より、名義あり、照東  
方、方、心、去、り、世、界、を、知、る、を  
遠、く、眉、間、の、白、毫、の、相、好  
り、眼、を、主、教、迷、り、相、曇  
り、手、先、小、漏、る、才、を、知、り、諸  
法、空、相、知、る、時、も、方、便、も、悉  
法、一、理、あり、や、凡、妙、法、の  
首、題、小、中、迹、初、終、の、經、卷  
志、心、の、二、字、少、極、り、迷、故、時、を  
三、身、火、宅、の、中、と、か、く、も、悽  
る、阿、火、白、牛、車、小、乘、して、ま

如、の、境、を、狂、ぬ、り、一、念、信、解  
の、唯、こ、の、經、を、ま、り、記

鳥羽殿

梅と  
兼久三年七月八日、日時氏鳥  
羽殿、小、糸、して、中、を、方、ハ、世、を、知、り  
に、く、酒、を、流、し、以、行、を、法、を  
家、を、知、り、て、ハ、時、ぬ、ま、り、情、を、知、り  
中、を、知、り、ハ、力、を、知、り、を、知、り、に、  
て、知、り、く、中、を、知、り、を、知、り、を、知、り、  
縁、起、の、中、を、知、り、を、知、り、を、知、り、  
を、知、り、を、知、り、を、知、り、を、知、り、











草花してぬ野道も程りの月  
位名の器よより波より走る夜  
り通函人目よくくを之を灯し  
不能も歩程より水手ハ押文  
つ系菊にすりるかりびか  
ハ賞感の星の林のわきとし  
よの音あをけけ天際  
つをりせり程に海に力  
の天不只ね一人此云童謡  
うの心ゆへけ海を後  
何れももるりあり糸の

由良湊

指上  
あしふふたぬ糸美  
あしふふたぬ糸美  
宛海うにうををもち  
此の人心花のまや葛城山の  
男あり雲より小やして  
獨りも位名の糸くも人を  
いそまぐとねまひり又  
男ふり女師花けらぬ  
何れももるりあり糸の























形は口は極楽の泥泥を  
身小くを得脱由きふんとか  
黒苗登降命泥泥多願をか  
おへぬまへ

み輪研

剛格上かろくと内石の渾北粒香に  
流りれけ私やけりぬ私を  
しとおりぬと積まぬるを是  
世不可得の通理ありかのい白く  
かろいおし白骨の父の忠赤  
肉ハ母の忠赤白二端をもし

字のハ別又母の忠徳あり  
とかのぐと和合して母の肉  
小やるとは月の間を白をい  
野ゆい月ハ系ハ月命の肉  
人牙赤白無此肉の肉  
光明の心はわかし三月ハ  
遠天とすとすたる所から  
他ハの字ありありなり  
朝ヨスルきりきりハ清きたり四月に  
人形とれは地ハ火の口大者  
相傳イ伝イ司イのく泥イの子イ



形をバツ後遺道法に續きたり  
又月と成終をれハ先相の  
法佛と別法のゆく也  
観念の時をハ心か  
神又臨六腑を又母ありを  
ととせし破くをせしを相  
八千種好し佛ありを  
あり諸身ハ身ハ心唯心の  
淨云とも觀し又又  
心深妙

法蓮華經も釋し  
出世父母中ハ前  
法利外の道神  
生田川

榮くふ年の英り生田川  
紫の無常ハ又常任不  
ハ中道あり



人間箇て縁生の観念（業天）は、  
ありあらずあらずの生命  
やも断人間有鳥の物変へ現視  
ありあらず學まして（上）行しりつも  
うたふ執（抄）く深生死の海か  
まの生田乃川の幾世迄夢の  
あまふふまふくん（大）とて身  
のゆくへ定ありそも終るハ  
夢のたぐはぬ波しんく

薬水

剛（多）実や身ねてもかゝる違り

鴻ちて今のたりのいく葉、  
あ又水ハハもつきしき（大）き  
海の流ハ絶もそも草の水  
小ハあはに五箇箇へ目水津（大）経  
のほ散りしとくしとくしとくし  
冬もや 津小実先ハたりそ  
夏やまろきゆくありまろく  
あ海まきとひとねり習えく  
のりや水と結らんいらく水を  
結らん（上）岩間の泉ふ（大）り  
みまりのかまやあねん（大）ん



和籬の菊花ハ重湯ノ酒の後  
切熟音ノ七賢カ樂陶淵明ガ  
難ハ唯ノあふ小強きりあぐわ  
やくちみ茶をさ思ノ為小出  
さき八曲水小流ふあむハ石  
小出りやたをくくもふ小  
をとりては後主すあむして  
月を流ふくや列し月をく  
しよ

市溪流

和籬やとれあむか理や我あぐわ

身より出に悪報の責人小まを  
とらふと是ありや人ふあを  
比くりしつをいんせ小歌りた  
危者ノ染いあむあさふあを  
うふく夜あ希ゆくをハ  
そのと海風波り音うく小流を  
さき夢の所りくまをえてそる  
夢の而然ハ長むまのこあ  
んねみあむあ油とを

法樂

和籬やとれあむか理や我あぐわ



ひろく家道ひびくつらり  
ありや公のあ清を社法の家  
あねむゆくもやもすい酒家  
ひりりして雲のうら二世あ  
樂ハ有瀬

松竹

剛上あも不見えたる松竹の枝葉  
も秘上不上生上とあや思上う我上足上も  
千代終上へすい上足上理上り上所上以上伸上  
代上の上ち上み上と上う上え上て上百上代上の  
表上多上ね上あ上り上り上と上竹上の上い上や上う

いふをいふつらり  
幾上久上小上に上多上妙上む上と上急上い上は上す  
せ上か上日上松上が上年上の上い上り上あ  
萬上歳上の上ま上の上ま上て上と上急上あ上よ上か  
わ上い上り上や上た上に上松上竹上を上と上か  
さ上い上り上や上松上と上竹上と上い上あ上も上  
小上栄上え上り上あ上る上君上り上代上と上い上ぶ  
さ上ま上は上り上舞上つ上も上あ上は上す上の上  
あ上木上の上枝上あ上れ上と上舞上ハ上先上木上あ  
あ上わ上り上て上舞上り上は上あ上り上あ上り上あ上り上  
上上さ上ま上出上て上舞上い上あ上せ上り上せ上ら上よ



















ゆりののほくそくあつた  
のゆめをる目のまをり  
えりゆめのゆめあり

雪山

有箱やうかたうらみあや  
してうらやゆきの年  
む大月山の道直ふ紙束る年の  
まのあてうき川も残る雪の  
り小紙路をうらむ雲井の  
本と初まありまうらあ  
面白のききこちきふく

あまふ面白きうらみ  
てまわう我もあな心  
こふ喘く月の影  
てまわあふや雲のま  
花の梅つかし清浄の水  
壁しきう面白く故人の  
紫しきうらみあふ  
つみ深まの死よ入と雲  
もそそりる衣の公が構  
まてし月が十里小町あり  
あやはゆ代のやう豊のあり











くろくじまのふくふくのこねふん  
ゆるくせ終るゆねをいふ年ハ  
端ふりのをあましくあはれひさ  
もろくろくちを法親すむく丸京  
や<sup>ラチラド</sup>氏人しりて植一本の年しり  
めらくくぼき改程かくあふふ  
をふくあふ物ねを南社の法親  
ひふも人のまねはうまうまね  
本の成もなうふけくあそね  
くましく情もなうも何故う人  
の軽しもあまね本ののあふ

わねの海もねに成物と植直  
ありゆきハ慈悲萬行り日の  
影も三三のふん長田もてお重  
唯識の月ありえハ日ありゆき  
く海もあふく<sup>ア</sup>をたのまね  
中せ唯ありそあふうあふも  
草木園を成佛の部もとあな  
あふくあふ思ひほひり<sup>ア</sup>あふ  
くねる其初めく<sup>ア</sup>法親も園か  
このありくもあふみとりり  
あふひくもあふあふ<sup>ア</sup>法親も



のたぬひさし。昔ハ其體心  
して妙法華經をよき終ふ  
じハ高生を度せんとして大光明  
あらしめし。又云コトコト  
たぬも三益れをけり候ども  
相堂櫻樹の本法とて感あり友  
唯てわらも花をまじふ。長閑  
けハ其心淨土のともふに  
ちや淨土のともふにちや

橋柱

剛丈うき世の常めきる電光

てう露もたたくか人同有焉  
のせり方極道意泡沫又柱あり  
くかうりきる世中ちやちや  
影も小車の影。道をつるて  
ら河の心もあましく橋より  
唐澤の心はあましく

自然物記

剛上  
剛それ一代の教法ハ五時八教とつら  
教門教糸を分たれり。五時ハ  
華嚴河合方ホ般若法花羅散  
とてそれし。通の同よりあや



教はう秘藏をうあま相う  
身うもひと用きううひ朱唯  
う佛法と宗教せらん 秋

んえんこのたうあり。法うあふ  
法界者うふ家あり。禁戒をか  
きううあううううううう

きんうまうのくゆううう果爾  
あうあうううううううう

混えんの住家をうううのまう  
ううううううううううう

ううううううううううう  
流うあうううううううう  
ううううううううううう

自然心地。今ハ山深ます。のう

おねううううううううう  
ううううううううううう  
ううううううううううう

もううううううううううう  
を珍て入ふ。奥ハうううのう  
ううううううううううう

ううううううううううう











岩ほのうさぎをきりぬきとらま  
る圃うまうりしとぞくもれやあ  
つさくらまきとくきりぬきとらま  
うま行ゆ代のたふさよらうやく  
ゆ代のちやとらま

三九 剛

千里のゆも長閑とて高峯の  
雲もとらまきりぬきとらま  
もぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
方よあまのきりぬきとらま  
まきりぬきぬきぬきぬきぬき

まきりぬきぬきぬきぬきぬき  
萬代もぬきぬきぬきぬきぬき

人日 剛

草葉みりりよぬきぬきぬき  
いほぬきぬきぬきぬきぬき  
まきりぬきぬきぬきぬきぬき

桃花節 剛

上指  
三千年よなるとてふ桃のそりり  
花咲きふあはれもぬきぬきぬき  
君う代りぬきぬきぬきぬきぬき



みきとすらてもち人のとらて  
も白ふらつすのうも長田の  
時<sup>コ</sup>もや<sup>カ</sup>まふ<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>極の花威  
や<sup>ニ</sup>い<sup>コ</sup>上<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>色<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>れ<sup>ル</sup>幾<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>り  
花<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>ぬ<sup>ル</sup>も<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白  
曇<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>もの<sup>ノ</sup>ふ<sup>ク</sup>あ<sup>ハ</sup>つ<sup>タ</sup>ま<sup>ラ</sup>ず<sup>ト</sup>ゆ<sup>ク</sup>心  
ち<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>盪<sup>リ</sup>も<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白  
来<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>極<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>リ</sup>ぬ<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>を<sup>ト</sup>り  
ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>の<sup>ト</sup>ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>

上巳 剛

上巳 剛  
極の花<sup>ノ</sup>咲<sup>ク</sup>や<sup>ト</sup>三月<sup>ノ</sup>れ<sup>ニ</sup>み<sup>カ</sup>の<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>

わ<sup>キ</sup>を<sup>ト</sup>流<sup>ル</sup>く<sup>ト</sup>つ<sup>タ</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>  
名<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>面<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>  
盪<sup>リ</sup>ぬ<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>  
へ<sup>ト</sup>花<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>  
名<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>面<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>

三月 盡 采

上巳 剛  
曇<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>もの<sup>ノ</sup>ふ<sup>ク</sup>あ<sup>ハ</sup>つ<sup>タ</sup>ま<sup>ラ</sup>ず<sup>ト</sup>ゆ<sup>ク</sup>心  
ち<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>盪<sup>リ</sup>も<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白  
来<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>極<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>リ</sup>ぬ<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>を<sup>ト</sup>り  
ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>極<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>の<sup>ト</sup>ま<sup>ウ</sup>ち<sup>ト</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>ク</sup>











君ふりきんいりく君ふりきん

夏被剛

賢哉川の氷底をきて  
行て思ふも被もるも夏と  
秋と行ふもさるゆりも  
さの成流すも被川も  
あさの大ぬりもわく  
すの神もさるも今日も  
被して千年の命の  
千年の命のわらや

素秋剛

それとせり秋をとも  
あさの紫吹くもさるも  
あさの夜も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も  
あさの朝も秋とて露も



あなれの紫のらりせぬ秋りり  
てたき教しせぬ秋りり  
たき

強縁節 剛

<sup>上</sup> 蕭<sup>上</sup> 詠<sup>上</sup> 涼<sup>上</sup> 風<sup>上</sup> と 裏<sup>上</sup> 槩<sup>上</sup> と 誰<sup>上</sup> り 討<sup>上</sup>  
會<sup>上</sup> して 一<sup>上</sup> 叶<sup>上</sup> 小<sup>上</sup> 秋<sup>上</sup> ち<sup>上</sup> しく 鳥<sup>上</sup> 鶴<sup>上</sup> の 橋<sup>上</sup>  
の<sup>上</sup> も 糸<sup>上</sup> 知<sup>上</sup> 紫<sup>上</sup> を 敷<sup>上</sup> 二<sup>上</sup> 星<sup>上</sup> の 陸<sup>上</sup> 舟<sup>上</sup> の  
前<sup>上</sup> も 川<sup>上</sup> 波<sup>上</sup> や う<sup>上</sup> たり 実<sup>上</sup> 夕<sup>上</sup> 月<sup>上</sup> の 光<sup>上</sup>  
遠<sup>上</sup> 秋<sup>上</sup> と 小<sup>上</sup> 秋<sup>上</sup> と 秋<sup>上</sup> の ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> や <sup>上</sup>  
年<sup>上</sup> を 終<sup>上</sup> て かり<sup>上</sup> ぬ<sup>上</sup> も の 織<sup>上</sup> 非<sup>上</sup> の<sup>上</sup>  
契<sup>上</sup> あり せ<sup>上</sup> り 久<sup>上</sup> し<sup>上</sup> 天<sup>上</sup> 川<sup>上</sup> 流<sup>上</sup>  
去<sup>上</sup> 思<sup>上</sup> へ<sup>上</sup> り<sup>上</sup> 葛<sup>上</sup> 代<sup>上</sup> の 秋<sup>上</sup> り<sup>上</sup> せ<sup>上</sup> ぬ<sup>上</sup>

ふせ<sup>上</sup> 渡<sup>上</sup> を ち<sup>上</sup> ら<sup>上</sup> せ<sup>上</sup> ら<sup>上</sup> ぬ<sup>上</sup> 也<sup>上</sup>  
せ<sup>上</sup> ぬ<sup>上</sup> たり<sup>上</sup> 橋<sup>上</sup> も 絶<sup>上</sup> せ<sup>上</sup> ぬ<sup>上</sup> 也<sup>上</sup>  
り<sup>上</sup>

乞巧夕 剛

<sup>上</sup> 行<sup>上</sup> 末<sup>上</sup> 八<sup>上</sup> 日<sup>上</sup> 久<sup>上</sup> 賀<sup>上</sup> の 天<sup>上</sup> つ<sup>上</sup> 海<sup>上</sup> の 舟<sup>上</sup> の  
秋<sup>上</sup> と 小<sup>上</sup> 秋<sup>上</sup> と 秋<sup>上</sup> の ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> や <sup>上</sup>  
<sup>上</sup> い<sup>上</sup> は<sup>上</sup> 織<sup>上</sup> や 錦<sup>上</sup> の た<sup>上</sup> て ぬ<sup>上</sup> き<sup>上</sup> も <sup>上</sup>  
く<sup>上</sup> 礼<sup>上</sup> せ<sup>上</sup> て む<sup>上</sup> き<sup>上</sup> 小<sup>上</sup> 秋<sup>上</sup> 草<sup>上</sup> の 露<sup>上</sup> の  
玉<sup>上</sup> 珠<sup>上</sup> ち<sup>上</sup> 向<sup>上</sup> つ<sup>上</sup> ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら <sup>上</sup>  
あ<sup>上</sup> 音<sup>上</sup> も<sup>上</sup> ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら <sup>上</sup>  
つ<sup>上</sup> 羽<sup>上</sup> 神<sup>上</sup> を ほ<sup>上</sup> ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら ち<sup>上</sup> ら <sup>上</sup>



庭のそとに火のこきりぬき  
しきつれぬら〜ぬきさび

星夕景

夕景もくわたりきふたり秋の  
七日の夕あり行ハ星の平印も  
好く小川天つ水く使草の露  
のきふ〜適あひてよりこの  
恨をだふも叙けりよあ夜将小  
雨あむと〜涼川流その勢の小  
路をば〜わりの語ふたむしを  
白横道の静さ河りよ〜

中秋節 剛

あまハ又秋のゆくも過ぬへ〜  
よしの月あり〜手は〜  
くしあきあせもら月の曇ら  
あく〜里の外まで帰も〜  
あ〜の月の〜の習ふ〜  
や〜影ハ〜あ〜絶せ  
ぬ〜あ〜あ〜今秋  
ふ〜あ〜あ〜ひ〜

三五夕 剛

あ〜らぬもあ〜く〜秋の



夕陽の影をうけて  
白くくちやうの  
雲の上から  
海に  
のぼる  
夕陽の影をうけて  
白くくちやうの  
雲の上から  
海に  
のぼる

湯敷節 剛

一年の昔木も花も  
色香うりたぬ菊も  
年が移りゆく  
あはれく谷水の  
年を命の  
たりし

夕陽の影をうけて  
白くくちやうの  
雲の上から  
海に  
のぼる

重湯 剛

深きよの夜  
夕陽の影をうけて  
白くくちやうの  
雲の上から  
海に  
のぼる

九月廿二夜 剛



上指  
 長月の今秋の空をせりりし  
 ちかゆく雲のまじゆをばあき  
 しくゆるくかきあへ人の聲  
 せりりし秋のついでに  
 世のあはれもやあきぬく人の聲  
 ぬふたは月のし夜もあふた  
 月のとと秋のち

九月書 栗

上指  
 夕日乾りしやもまの谷のふ  
 けりあきやるくくみんか  
 けむりしやるくくみんか

き今日もとと時雨てをを  
 ぬらんか長月の末巻のまに  
 雲をまてつはのふたりぬ  
 雲の色もこもるりハるは  
 雲のぬもあきりみりか  
 とやゆて行秋のあきを  
 ちかあきをたふふべし

玄あし 剛

上指  
 ちかあしふりしをを  
 ちかあしふりしをを  
 ちかあしふりしをを



歳せまきしよりなりぬらぐら  
代りなきりて君り御代を  
後ふおれやあふれの面は  
も松はまきとの色はくを  
かほのあはきお雪の白ゆ  
五百重つりして豊の年を  
も何のうや方あ四だほ  
りやとくたのむは代り  
しきたのむは代り

礼書 剛

<sup>上</sup>あうりま深まの苑小入と雪解

山をそり花度公う樓小のほ  
七月千里は明かりサアア  
をもるぬのりきとあやたひ  
直うしとれと白ゆの笑りは  
の色あかくなき節ふもた  
てきき山降ゆぬ豊との例も  
あくあはきりハハハハハ  
まきし深も言のつ

歳言 剛

<sup>上</sup>も終ふ紅葉はねわくえりかほま







くねにくもる多岐もはるねにく

西園下

剛勇、二年の秋、須平家西海、  
了結、其勢、合七十餘騎、  
を隔つる山、海や、関戸、院、不、  
少、樂、を、樂、と、名、く、八、岐、の、  
少、辨、も、由、や、八、岐、大、  
人、會、も、り、  
女、  
車、  
多、  
也、

今、  
浪、  
所、  
已、  
外、  
松、  
一、  
少、  
此、











先帝の君は浦ふんをさ  
て靴装の首ハのちとく  
浪の末をらるるの願多月  
の石深千餘の年を居て  
終りありしををいひか  
りくくまを船より車に  
えりくまをいひか  
ゆきの浦ついで孫氏の道  
なまは年家所陣り  
又は浦と漕かに志を  
物や尾上のねれ方あり

はく小橋く人室の泊の  
あはれまもた月夜柱女の  
娘輝く燈をともし  
小のいまなるより  
うし海に廻り  
空のくまをいひか  
もの浦あり民は  
着海と後ぬかりの音  
鳥のいあ霜ちり満く  
江村の漁火もわのふ  
り雪もたむけ











あをくろやまをぬんを楸津川  
さめまゝのりしものゝりし  
洋茅は赤色く楸田の文  
いさよ 八巻菜官の  
小千代は身の不死の業  
く様少船を伸すのぬりん

同

挽  
ゆりの根の場より波に八橋  
色小舟のりしものゝりし  
手あし遠くぬくと福ちも今

身は上あきまきま  
ハきりゆらやまをり宿赤坂  
かきり友の枝の梢の花を  
煙の三村の八高師の  
干れをりし名坂茶海  
さる漕の舟は船具楚  
折もあ乾埤日夜  
らん子あきまきま  
力水鳥のあきまきま











縁ふゆり勢て諸國を巡るふ名 上二一

以舊跡おのつゝり持て文向塵世

の姿を現も隔なく カ 去脚来れ

境取らるる 詞 多ふ方相國泊瀬の

觀世音も多殊殊勝の法事おれら

去りしを余も誇し 二 今午の致景成

ふふり ト 入谷めらるる人

家重ふつゝなるを 二 晩鐘雨小昏ぬ

河隈と 上 於言の 二 多雲り浪が

さゆり 二 海りぬくふて 二 又

や 二 の 二 せ 二 く 二 此 二 泊 二 瀬 二 の 二 守 二 へ 二 ら 二 る 二 也

こ 二 の 二 身 二 に 二 ね 二 ま 二 ひ 二 あ 二 り 二 と 二 名 二 を 二 せ

也 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ

神 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ

多 二 少 二 多 二 少 二 の 二 事 二 の 二 人 二 多 二 堂 二 此 二 西 二 の

は 二 多 二 少 二 多 二 少 二 づ 二 つ 二 ひ 二 多 二 少 二 多 二 少 二 の 二 意 二 也

多 二 少 二 の 二 身 二 に 二 ね 二 ま 二 ひ 二 あ 二 り 二 と 二 名 二 を 二 せ

也 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ

也 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ

也 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ

也 二 の 二 名 二 を 二 せ 二 る 二 也 二 の 二 名 二 を 二 せ



ふふあはましくく扇ふを合意今  
あはゆももをこととてあはれ入

後門の四千中乃ね原めて事家れ

あ達六代ゆあれまうまをあはれ

あをいんていさ甲者の作くやもあへ

まをいんていさ甲其時あの中居

らあはれまもいしとあひふまてあ

まあはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

ふあまてあはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ

あはれまもいしとあひふまてあ



心も好まざらんあは誠まじき  
なほもみ友又奇な衣乞と来り  
て中を穿りて唯より入る所小  
多ふもやまをさすゆの程あり何  
そて思ふはむを記せり人の群を  
そすぬえり或あり枯野の草  
る象れ世ふるをさすそくおの露  
かゝる強ふがうはくま  
のしほふ強ふがうはくま  
油粥の種の変ばるは世あり  
中ハ諸の至常の程ありあるあ  
る親をれ夢幻の時のももり杯

くもあはしき里れうすてあはれ  
かり時をありひるを赤き馬  
あゝと場をぬ胸れ火をさす  
て身ハ清くうりぬりぬるは  
そもわつ子ありあはれんそも  
まはさけりもわらひるももも  
あはれんそもあはれんそも  
悲の親世音願くはありれゆ拍  
小すうせは念波親言わ力身健  
切力実徳を給はさるるは  
そも我の助をまやがはる











